



ホセ・ルイス・トマハンボ 60歳
料理人

ホセ・ルイスは、アンデス北部の「ジャングルの眉」と呼ばれる場所で生まれ、現在はその近くに住んでいる。彼の両親は小さな土地を耕す農家で、11人きょうだいの7番目として、学校が終わった後や週末に農作業を手伝っていた。16歳のときに働き始め、最初はサトウキビなどを収穫する農夫として、その後には倉庫管理人として働いた後、リマとアマゾン北部をつなぐハイウェイ建設に携わる米国企業の調理場で働くようになった。この騒々しい会社の調理場で、彼は料理を覚えた。それ以来、料理はホセ・ルイスの大切な技術になり、彼を一家の大黒柱にした。

2007年5月に体調不良を訴えたとき、ホセ・ルイスは、11年前から患っていた糖尿病が原因だと考えた。下痢と腹痛に苦しみ、8日間で体重が10キロ減った。家族が彼をリマに送り出して初めて一連の血液検査を受け、そこでHIV陽性であることが判明したが、なぜ感染したのか彼には分からなかった（ホセ・ルイスは、1980年代～1990年代の自分が性的に活発なとき、性交渉の際にコンドームを使用することが重要だとは知らなかったと言う）。この診断に驚き、彼は自分がもうすぐ死ぬのだと思った。当時を振り返って「それはとにかく恐怖でした。二度と働けなくなると考えると、絶望的な気分になりました」と話す。

ホセ・ルイスは、診断の直後に抗HIV治療を開始したが、震え、倦怠感、食欲不振などの副作用のために2週間後に治療を断念した。しかし、1ヶ月後には治療を再開した。現在では、よく眠れ、体重も（わずか49キロから）20キロ増え、「ほぼ正常」だと感じており、調理場での仕事にも復帰した。94歳の母親と暮らし、料理店を開店するために貯金している。



マリー・ソニ・サンルイ 33歳
子守

「自分がHIV陽性だと聞いて、胸が押しつぶされそうでした」とマリー・ソニ・サンルイは語る。「どうしたらいいのかわかりませんでした。自分は死ぬんだと思いました」。2007年11月に診断を受けた後、数ヶ月間はまさに死んだような状態で、母親の家の小さな一室に閉じこもっていた。ハイチの中央高原の貧しい地域にあるこの小さな家は泥と小枝でできており、近くの道路から1時間歩き、丘を登って、川を渡ったところに建っていた。マリー・ソニは体が弱っていたので、ほぼ一日中、土間に敷いたむしろの上に横になり、ドアの外を眺めていた。室内にベッドがあったが、高すぎて登り降りができなかった。1日のほとんどを一人で過ごした。毎朝、地域の医療カウンセラーが6時前にやって来て、その日1回目の抗HIV治療を行い、夕方に再度やってきた。お昼前に入浴を済ますようにし、時には外に座って、母親が近くの丘に生えている柑橘系の木を剪定する様子を眺めることもあった。

マリー・ソニの免疫系は非常に弱っており、最初に診察を受けたとき、医師は彼女が生き続けていることに驚いたほどだった。しかし、2007年11月に抗HIV治療を開始してから、彼女の免疫系は力強く持ち直し、時間はかかったものの自信も取り戻した。また彼女は、なぜHIVに感染したのかわからず悩んでいた。「私は、自由奔放な人間ではなかったし、なぜこんなことになったのか本当に分かりません」。現在、マリー・ソニは杖なしで歩けるようになり、閉ざされた部屋の外の生活に耳をそばだてるだけの暮らしから、その生活に参加できるまでに回復した。彼女は留守番をし、農作業をし、二人の子供の世話をしている。そのうちの一人、7歳のルーベツは、ポルトープランスの叔父の家に身を寄せていたが、母親と暮らすために戻ってきた。「体調が悪かったときは、話し方もゆっくりで、元気がありませんでした。体を起こしたいと思っても、誰かに手伝ってもらわなければなりません。まるで牢獄に閉じ込められているようでした」と彼女は言う。「今は、その頃とは大違いです。ここに座って、普通の人と同じように話ができます」。



レルネル・シェリー 38歳
トラック運転手、整備士

つい最近まで、レルネルは、筋肉自慢のがっしりしたトラック運転手、そして整備士として、ポルトープランスに暮らしていた。彼は仕事が好きで、勤務先の運送会社でも主任として尊敬され、人生を楽しんでいた。服装もおしゃれで、夕方には友人たちと近所のバーでラムを飲んだ。妻のクローデットとは1994年に結婚したが、レルネルはトラック運転手として働いている間に何度も浮気をした。2004年には男の子が生まれたが、診断未確定の病気のため、その翌年に死亡した。そのとき、クローデットがHIV陽性であることが判明した。その後、彼女はまた妊娠したが、今回は、子供にHIVが感染しないように抗HIV治療を受けた。2007年5月、娘のレジカが生まれた。

娘が誕生してすぐに、レルネルは体調を崩したが、エイズ検査を受けることは拒んだ。彼は無料の公立診療所に助けを求める代わりに、家族の貯金を使って民間の医師の診察を受けて腸チフスと診断され、高価な治療を処方された。この治療が失敗し、ようやくレルネルは公立診療所で診察を受け、エイズを発症していることが判明した。「その事実を聞かされるのは、とてもつらいことでした。ちょうど子供が生まれたばかりだったので、それが心配でした」。

レルネルは2007年10月に抗HIV治療を開始したが、すでに遅すぎた。1日中ベッドに横になって、体は弱り、痛みで動くこともできなかった。神経障害を患い、立つことも歩くことも困難になった。トイレに行くのも苦痛で、そのたびに疲労困憊し、涙がにじんだ。筋肉は萎縮し、肌は乾燥してうるこ状になっていた。精神的に閉じこもり、生きることを諦めたようだった。治療開始から6ヶ月後、レルネルは亡くなった。38歳の若さだった。



オウサ・アドルフ 26歳
家事手伝い

オウサがトモンドのザンミ・ラサンテ病院で抗HIV治療を開始したとき、医師は、彼女があと数日しか持たないだろうと考えていた。彼女は、慢性的な栄養失調で体重が75ポンド（約34キロ）しかなく、歩くこともできなかった。彼女の消化系は機能せず、意識がはっきりしている時間はわずかだった。肌には、多くの傷口が開いていた。蚊に刺された跡が治らず化膿してできた傷だ。患者仲間に希望を見出すこともできなかった。入院中に同じ病室の9人が亡くなったのだから。

しかし、オウサは一命を取り留め、瀕死状態にあった彼女を知っている人々に感銘を与えている。現在、オウサは、兄のオールドーと彼の家族と一緒にカスで暮らしており、1マイル歩いて近くの小川から水をくみ、洗濯や兄の子供6人の世話、食事の用意を担当し、農作業も手伝う。彼女を避けていた一部の近隣住民は、現在も、彼女の病気と回復に疑念の目を向けている。それはハイチ全土にエイズへの偏見が根強く残っているためだ。

オウサは地方で育ったが、以前はドミニカ共和国で裕福な家庭のメイドとして働いていた。体力を取り戻すにつれて、両親の家に戻り、小さな土地を耕して、両親の面倒を見たいと考えるようになった。ハイチの農村部では、末っ子が年老いた両親の世話をするのが慣例だ。彼女は、すでに死亡した前のパートナーから感染したと考えている（オウサは2002年に出産しているが、子供は産後間もなく死亡した）。自分の過去と背負った運命を教訓に、もう二度と結婚することも子供を持つこともせず、誰かと恋に落ちることさえもしない、と彼女は言う。「私は病気で、他の人にうつしたくはないのです。私はもう、一人でこの病気と向かい合って生きていけます」。



マリー・テレーズ・ノエル 41歳
工場の清掃作業員

多くのハイチ人と同じく、マリー・テレーズは、性的接触によってHIVに感染したことを知っていたが、この病気が「精神的なもの」だとも信じていた。体調不良を感じたとき、彼女はまず、「オウガン」(ブドゥー教の僧侶)に相談し、2ヶ月間と蓄えの全てを投じて回復を祈願した。しかし、病状は急激に悪化した。最終的に、2005年にHIV陽性の診断を受けていた姉のマリー・プリンシリアと、ブドゥー教の僧侶であるその夫のジェイが自宅近くの救急病院にマリー・テレーズを連れていった。マリー・テレーズは、なぜこの病気に感染したのか見当もつかなかった。彼女は、これまでに3人の娘(20歳、16歳、7歳)の父親である二人の男性としか性交渉を持ったことはなかった。最も可能性が高いのは、末娘マニュエラの父親からの感染だった。彼は、2004年に高熱を出した後、死亡している。マリー・テレーズは、「私はふしだらな人間ではなく、なぜこの病気にかかったのか分かりません。自由奔放な生活を送っていたわけではないのです」と話していた。

体調を崩すと、マリー・テレーズは、子供たち、特にマニュエラの世話をすることができなくなった。「マニュエラが学校へ通えないことを考えるのはつらいです」と彼女はいう。マリー・テレーズは、フェジェアにある姉宅の一室に閉じこもり、近くにある埃っぽい国道からの音を聞きながら、自分の人生、子供たち、病気について考えながら過ごした。

このような考えが、病気よりも良くなかったと彼女は言った。2007年11月に抗HIV治療を開始し、医師はすぐに回復するだろうと考えた。彼女は真面目に薬を服用していたが、病状は悪化していった。彼女は、入院から10日後の1月18日に亡くなった。マニュエラに母の死を伝えるというつらい役目は、伯母のマリー・プリンシリアが引き受けた。マリー・プリンシリアは、当時を振り返り、次のように語る。「あの子は、私に寝かしつけることさえ、させてくれませんでした。あれ以来、マニュエラは口を開くことが少なくなっていました」。

HIV、エイズ、抗HIV薬

HIVは、「ヒト免疫不全ウイルス (Human Immunodeficiency Virus)」の略称です。HIVは人間の免疫細胞に感染し、その機能を破壊・損傷させます。このウイルスに感染すると免疫の損傷が進行して「免疫不全」となり、さまざまな感染症にかかりやすくなります。免疫機能が低下することで発症してしまう感染症は、「日和見(ひよりみ)感染症」と呼ばれます。命にかかわる最も典型的な日和見感染症は結核です。

エイズ (AIDS)とは、「後天性免疫不全症候群 (Acquired Immune Deficiency Syndrome)」の略称で病気の名前です。HIV感染を原因とする免疫不全に関連して現れる症状や感染症、がんに基づいて、エイズであるかどうかの診断が下されます。HIVに感染した大部分の人は、治療を受けなければ、5年から10年でエイズを発症します。ただし、中には10年から15年以上も発症しない人もいます。

抗HIV薬を服用すると、HIV感染のレベルを低下させることができます。ただし、ウイルスを体内から完全に取り除くことはできないため、これらの治療薬を一生服用し続けることが必要です。こうした抗HIV薬の第1号であるAZTが1980年代に発売されると、続いて多くの治療薬が登場しました。十分な治療効果を得るため、また副作用を減らし、薬剤耐性のウイルスが生じる可能性を最小限に抑えるため、現在は、複数の抗HIV薬を併用して服用する療法がとられています。

2000年の時点では、患者1人が1年間に使用する抗HIV薬の費用は15,000ドルから20,000ドルでしたが、製薬会社に対する国際的な圧力、競争の激化、および国を超えた資金援助の強化による市場拡大を受けて、現在、患者1人当たりの治療費は年間100ドルにまで下がっています。